

平成 22 年 6 月 16 日現在

研究種目：基盤研究（C）
 研究期間：2007～2009
 課題番号：19560653
 研究課題名（和文） 初期ルネサンス建築理念と人文主義思想との関連性に関する研究
 研究課題名（英文） Relationships between Architectural Idea and Humanism in the Early Renaissance Florence
 研究代表者
 石川 清（ISHIKAWA KIYOSHI）
 愛知産業大学・造形学部建築学科・教授
 研究者番号：40193271

研究成果の概要（和文）：本研究「初期ルネサンス建築理念と人文主義思想との関連性に関する研究」は、中世後期イタリア（主にフィレンツェ）の都市国家の確立・発展に貢献した人文主義思想と、それらの空間的体現としての初期ルネサンス建築とその理念との関わりを、人文主義者たちによる都市讃美など都市・建築に関わる言説と、当時固有の職能として確立しつつあった<建築家>による建築行為を詳細に分析・考察することで明確にしようとしたものである。

研究成果の概要（英文）：The aim of the study is to clarify the relationships between architectural idea and humanism in the early Renaissance Florence. Descriptions of the humanists contributed to the formation of city-state and its development in the late medieval Italy. The principles of the humanists were embodied in the early Renaissance architecture. As a result, the paper revealed the characteristics of the relationships of architectural theory and practice.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2007 年度	1,200,000	360,000	1,560,000
2008 年度	1,100,000	330,000	1,430,000
2009 年度	1,100,000	330,000	1,430,000
年度			
年度			
総計	3,400,000	1,020,000	4,420,000

研究分野：工学

科研費の分科・細目：建築史・意匠、建築史

キーワード：人文主義、初期ルネサンス、ブルネレスキ、フィレンツェ、建築理念、都市条例

1. 研究開始当初の背景

人文主義思想体系との関連の中で建築を論じることは、建築設計技術・理論と歴史意匠に精通しながら、さらにイタリア史、ヨーロッパ中世政治・経済史にも深い造詣を持つ必要があるために、旧来の工学系建築史研究の範疇では至難である。私は、東京工業大学大学院博士課程在

学時の 1982-84 年にイタリア政府給費奨学研究費を受けてフィレンツェ大学で建築史研究に従事して以来、そのようないわば領域横断的研究に従事してきた。

本研究と関わる私の個人研究(第1論文とする)である学位申請論文「建築家の職能形成過程にみる初期ルネサンス建築の諸相に関する

研究」(東京工業大学)において、初期ルネサンス建築を特徴づけている様々な社会的位相を明らかにすることを目的とした。建築家という職能の形成過程という視点から、1)建築家を意味する *architectus* という用語がどのように用いられ、それが変化していくのか、2)建設組織の様態がどのようなものであり、設計手法がどのような特性をもっていたのか、3)どのような経緯で機能に応じた建築が定型化していくのか、という3つの位相における初期ルネサンス建築の特性を解明した。それぞれの位相に建築家という職能が確立に向かう兆候を読み取ることができ、中世後期から盛期ルネサンスへ移行する単なる文化的過渡期ではない初期ルネサンス固有の建築特性を確認することができた。

また、本研究と関わる私の個人研究(第2論文とする)平成13-15年度文部科学省科学研究費助成金基盤研究(C)(2)「イタリア・ルネサンス期の建築図面集における表現法と古代受容の特徴に関する研究」においては、古典復興を自らの時代形成のアイデンティティとしたさまざまな重要でかつ荘厳な建築が数多く建設されたルネサンス期に、それらの建築のパトロンに建築家はその建築の設計意図を示すために、あるいはその建設現場において施工にあたる建設職人たちに建築家の設計詳細を提示するために、当然のごとく何らかの媒体が必要であり、14世紀、15世紀前半のほとんどの建設現場では建築家が発注し、指物職人 *legnaiuolo* が制作した模型がその媒介となっていたが、15世紀後半以降、羊皮紙、小牛皮紙、あるいは紙に描かれた建築図面が徐々にその役割を占めるようになっていった状況を明確にすることを試みた。建築家の意思伝達の手段としてその重要性がありながらも、建築図面の使用の実態はなかなか把握できないという状況があるが、建築図面自体がルネサンス期にどのような発展を遂げたかに関して、その物的特性の変化、図法の変化(立面表現における透視図法から正投影法への変化)、その他さまざまな多変数的な発達変化の総合的把握がなされていなかったが、建築図面に関するこのような総括的な理解こそが必要であると考えた。

また、本研究と関わる私の個人研究(第3論文とする)平成16-18年度文科省科学研究費助成金基盤研究(C)(2)「イタリア中世後期の都市条例にみる街路景観整備と住居建築デザインの変容に関する研究」においては、イタリア中世後期の街路景観整備に関する史料をフィレンツェ、シエナ、ペルージャ、ヴィテルボ、オルヴィエート等の都市条例に求め、同時期の住居建築デザインのパラダイムの変容が都市国家主導の街路景観整備と深い関係にあったことを証明し、その実態を詳述することを目的とした。我が国における中世後期からルネサンス期にかけてのイタリア建築史研究は、建築類型の研究や都市形成史という立場から研究がなされてきたが、そ

の当時の建築の様式や特徴は、建築家の創造的個性や美的精神によって醸し出されただけではなく、その時代の社会的制約やその政治体制の表徴体として存在している。そのような法制史・社会史的な観点から建築を問い直すことが通底する私の研究スタンスであり、中世都市条例を扱うことではまさに我が国では先駆的建築史研究であると自負する。

本研究は、以上概説した、社会史的な観点から建築を問い直した私の3つの個人研究(第1～3論文)で取り扱った、都市国家を制御しようとした思想、古典古代を称揚し、建築デザインに込めようとした人文主義思想自体と建築思想理念との関係を取り扱うもので、第1～3論文に通底している問題を取り扱う。本研究は、私の既出第1～3論文を補完するもので、それによって研究領域横断的な私の建築史研究に一応の完結をみることができる。

2. 研究の目的

本研究「初期ルネサンス建築理念と人文主義思想との関連性に関する研究」における研究目的は、中世後期イタリア(主にフィレンツェ)の都市国家の確立・発展に貢献した人文主義思想と、それらの空間的体現としての初期ルネサンス建築とその理念との関わりを、人文主義者の都市讚美記述と当時固有の職能として確立しつつあった<建築家>による建築デザイン手法から論じようとするものである。

本研究は、都市国家を制御しようとした思想、古典古代を称揚し、建築デザインに込めようとした人文主義思想自体と建築思想理念との関係を取り扱った横断領域的研究である。

3. 研究の方法

本研究の学術的背景として、イタリアにおいて中世後期の都市国家時代の議会録・都市条例が相次いで発刊・復刊されている状況がある。いままでイタリアの古文書館に通っては自分の研究と直接関連する手書き文書(手稿)を探し求める作業の繰り返しでしか入手できなかった情報が大量に活字化されることによって、必ずしも有能とは限らない地元の研究者のみが独占的に研究するという弊害がなくなった。

特にイタリア中世都市国家における法制史研究上の最近の研究成果として、Caggese, R. ed., *Statuti della Repubblica Fiorentina, Statuto del Capitano del Popolo degli anni 1322-1325*, Firenze, 1910; idem, *Statuti della Repubblica Fiorentina, Statuto del Podestà dell'anno 1325*, Firenze, 1921; Ciampi, I., *Cronache e Statuti della Città di Viterbo*, Firenze, 1872; Degli Azzi, G. ed., *Statuti di Perugia dell'anno MCCCXLII*, Rome, 1913-16; Fiumi, E. ed., *Statuti di Votterra 1210-1222*, Firenze, 1951; Lisini, A., *Il Costituto del Comune di Siena Volgarizzato nel MCCCIX-*

MCCCX, 2 volumes, Siena, 1903などがあげられ、本研究の原史料として利用価値が高い。

また、サルターティ、ブルーニ、ジャンノツォ・マネッティ等の初期ルネサンス人文主義者の著作のほとんどは現在では刊本として、あるいは電子データとして入手可能であり、都市条例と併せて読み込んでいく。

また、人文主義思想と建築文化との関わりに関する先駆的論考に André Chastel, *Art et humanisme à Florence au temps de Laurent le Magnifique*, Paris 1959 が挙げられ、Eugenio Garin, *Brunelleschi e la cultura fiorentina del Rinascimento*, in *Nuova Antologia*, June-Aug. 1977, pp.11-23 が建築家ブルネレスキを文化論的に論じたが、それ以降目立った進展は見られない。

4. 研究成果

14世紀末から15世紀初頭のフィレンツェにおける人文主義活動の中の一事例としてのレオナルド・ブルーニの著作『フィレンツェ市頌』は、ちょうどフィレンツェが初代ミラノ公のジャン・ガレアツォ・ヴィスコンティの死によって、ミラノ公国との戦争が回避された時代の著作であり、今日一般的に1403-04年頃の著作と推定されている。表面上は都市讃美 *laudes* の体裁をとり、中世以来の都市礼讃文学のジャンルに属しているが、実際には紀元100年頃のアエリウス・アリスティデスの『パナテナイコス』に倣ったものであり、古代ギリシャのモデルを利用した模倣的な作品とされている。ペルシャの脅威からアテネがギリシャの自由を守ったというアイリオス・アリスティデスの図式がフィレンツェにおけるミラノの脅威に重ねられたものであったとされる。

また、ブルーニのもう一つの著作『フィレンツェ人民史』はフィレンツェ史を暴君に対する自由人の永続的な闘争として捉えた代表的著作とされる。彼は平等な市民の政治的権利や、国家による公的顕彰の平等性こそ、市民の能力を覚醒させると説いた厳格主義者であり、これらの言説はフィリッポ・ブルネレスキやロレンツォ・ギベルティ、ミケロツォ・ディ・バルトロメオなど、初期ルネサンス期のフィレンツェの建築家・彫刻家の人文主義精神の形成に多大な影響を与えたにちがいない。その根拠は都市条例の条文に確認することができる。ブルーニはその政治的著作の中で建築を政治の道具として用いている。

フィレンツェの建築はトスカーナ地方内での中心都市フィレンツェの政治的地位の象徴であると考えられ、現実にフィレンツェの建設現場においても技術改革含む、様々な革新が行われた。ブルーニを代表とする人文主義思想と建築家・彫刻家の創意に相関があることは理解できても、どのように人文主義思想を汲み取り、建築デザイン、建築行為全般に組み込むことができたのかという、いわばブラックボックスを解明すること

は至難である。しかし、フィレンツェが古代の理想都市に値するののかという問いに対するレオナルド・ブルーニなど人文主義者たちの探究の中で、建築に対する新しい認識を形成し始めたように、建築家によるデザイン革新の中にも同様の思想が潜んでいると考えられる。

14世紀末から15世紀初頭の人文主義者で政治家であるコルッチョ・サルターティやブルーニ周辺を取り上げて、彼らの言説の中に見出される都市・建築に関するに対する考え方を抽出し、それらを初期ルネサンス期の建築家ブルネレスキ、アルベルティ、ミケロツォの実際の設計・理論に見られる理念と比較検討し、関連性を考察した。

フィレンツェの人文主義者たちが心に抱いていた都市は、ユートピア的な理想都市ではない。彼らが考え記述し、栄光とした都市はフィレンツェであった。彼らが機知を持って芸術、文化、学問の復興を期待したのはここフィレンツェにおいてであった。また、彼らはそのような復興がフィレンツェ市民によってのみ実現されると信じていた。人文主義者たちは、古典古代が完全な時代であると考え、また、すべての文化活動を導いてくれる古典古代を現代の規範モデルであると認識していた。したがって、その再生が実現したフィレンツェは、古代の理想都市の観念に追従しなければならなかったし、その市民も古代の人々によって達成された高い水準に到達しなければならなかった。

サルターティの召喚に応じて1397年2月にマヌエル・クリュソロラスは、コンスタンティノポリスからギリシャ語を教えにフィレンツェに到着した。彼は建築家像と建築の重要性を論じたギリシャ哲学の文書を再獲得することを可能にさせた。彼らはまた、プラトンとアリストテレスが政治的倫理的著書の中で都市計画と建築の問題に取り組んだことを忘れなかった。人文主義者にとって、建築は哲学的倫理的議論と直結するものとなった。

13世紀以降フィレンツェの都市国家形成において、実際の都市整備は、特別な美的規範 (*decorum*)によって秩序立てられたものでなければならなかった。アリストテレスの『ニコマコス倫理学』を想起させる「荘厳さ」*magnificentia* の概念を国家の権威を直接的に表現する都市・建築空間として、都市の代表的な公共施設としての大聖堂と市庁舎、そしてそれを結ぶカルツァイウオーリ通りは、政府が規定した美的規範を市民建築のファサードに適用しようとした都市内最初の場所であり、美的規範はよき都市生活の基本概念として活気を与えた。

この用語の選択が意図的でしかも重要であったことは、この時期のフィレンツェ公文書における例外的な異例さによって明確に示されている。公共建築と都市の改善に関する条項は、典型的にそれらの中での美と美的規範と用と荣誉による正当性のレパートリーを厳守している。「都

市の美と有用性を増すために」という語句は、しばしば用いられ、条文における見せかけの共通認識であった。

しかしながら、この建設計画に関わる 14 世紀の法令の中で「荘厳さ」は、わずか 3 つの事例の中だけに引き合いに出され、その使用はフィレンツェの最も重要な 2 つの公共建築と関わる文脈に制限されていた。その建物は新しい大聖堂とプリオーレのパラッツォであった。言い換えれば、共通善を増すための膨大な出費のコネクションがその事業の重要性と名声によって十分正当化される場合においてのみ「荘厳さ」は使用されたと考えられる。

人文主義者たちによる都市讃美を裏づける景観整備が着実に進行していた。1423 年にゴロ・ダーティはその偉大な建物の質を称讃し、《鎖で囲まれたフィレンツェ都市景観図》は、単に理念からだけでなく、視覚的に実体的な構造体によって都市を特徴づけた。

初期フィレンツェ人文主義者たちは、人間の美德と都市(civitas)に重きを置いた。これらのコンセプトは建築に象徴的に表現された。その意味において建築家は目に見えないものを可視化する能力を持つ人間とされ、フィレンツェの偉大さとその市民の美德は、みなが見ることのできる大クーポラとして体现化された。そして、その創造者であるブルネスキは、「偉大な建築家」と認識されたのである。

ブルネスキの教養、社会的地位、政治的経験、芸術的到達度、技術的発見、科学的知識に関する研究は、彼と同時代の芸術家に対する我々の理解を深めることに役立ったが、これらの研究は、彼の生涯とその業績の様々な様相を探究する試みであり、彼が同時代の人文主義者たちにどのように理解されていたかという問題に対しては、未だに本格的には探究されてはこなかった。同時代の人文主義者による多くの関連資料がその中の一つに過ぎないレオン・バッティスタ・アルベルティのそれを偏重するあまりに見過ごされてきた。解明すべき問題は、ブルネスキと彼の発見や作品が人文主義思想にどのような衝動を与えたのかにある。それは建築に対する人文主義者の理解の様相が解明されることにより明らかにされると考える。

14 世紀末から 1451 年のアルベルティの『建築論』De re aedificatoria 出現までの 15 世紀の建築と職能としての建築家の発展は重要であり、15 世紀の最初の 10 年におけるサルターティとブルーニの政治的記述の中での建築に対する言及は、後年の人文主義思想における建築と建築家に対する積極的評価の鍵となる。

フィチーノの師であるニコロ・ティニョージがアリストテレスの『ニコマコス倫理学』の語彙解説の中でブルネスキと彼の芸術に言及している。ブルネスキへの言及が芸術的美学的な関心によって導入されたものではなく、むしろブルネスキが人文主義者による人間哲学において盲

目的に例証された事実によって導入されたことをこの文書が示唆している。この言及の時期に特別の注意を払う必要がある。

そして、15 世紀半頃以降、人文主義者のブルネスキに対する関心の証しが、人文主義者が直接書かないにしても人文主義サークルの同時代の証言の中に多く見出されるようになっていく。

人文主義者たちがその政治的著作の中で建築を政治の道具として用いる中で、フィレンツェの建築は、トスカーナ地方におけるフィレンツェの確固たる政治的地位を象徴した。フィレンツェが古代の理想都市に値するののかという問いに対する彼らの探究の中で、人文主義者たちは建築に対する新しい認識を形成し始めたと考えられ、その様相をさらに原史料を通して引き続き解明していきたい。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 2 件)

石川清、中世後期フィレンツェにおける都市整備と理想都市像、地中海学月報、審査無、309 号、2008.4、4 頁

石川清、二つのシステーナ礼拝堂：シンポジウム報告、審査無、『地中海学会月報』、審査無 305 号、5 頁

〔学会発表〕(計 3 件)

石川清、まとめとして：アドリア海東岸の港湾都市を事例を含めて、平成 21 年度日本建築学会大会(仙台)建築歴史・意匠パネル・ディスカッション：海から見た都市・建築、日本建築学会、2009.8.26、東北学院大学

石川清、中世後期フィレンツェにおける都市整備と理想都市像、地中海学会主催ブリヂストン美術館秋期連続講演会『地中海とユートピア』、2007.12.8、ブリヂストン美術館

石川清、十五世紀の教皇庁と都市・建築—シスマからシステーナ礼拝堂建設まで—、第 31 回地中海学会大会シンポジウム「二つのシステーナ礼拝堂」(司会兼パネリスト)、地中海学会、2007.6.24、大塚国際美術館

〔その他〕

石川清、NHK ハイビジョン中継：フィレンツェ・ルネサンス～美の女神がほほえむ街：総集編(監修・出演)、2008.9.20 pm18:00-23:30

6. 研究組織

(1)研究代表者

石川 清 (ISHIKAWA KIYOSHI)

研究者番号：40193271